

祖母が伝えた「みんなのお金」

福岡県福津市立津屋崎中学校 3年 古木 凜音

夏休みの宿題のテーマが税の作文と聞いて正直わからないことだらけだった。この日本で、人々が公平に暮らしていく手段として、「税」があるわけだが、どこに使われ、どんな人の役に立っているのか、私は詳しく知らなかった。

私の祖母は、ファブリー病という難病を患っていた。そのため心臓が悪く、ペースメーカーを入れていた。それでも毎日、仕事場である大学に通い、休日に会いに行くと一緒に遊んでくれた。とても優しい祖母だった。そんな祖母は「タクシー券」というものを市から支給されていたのだが、毎回それを市役所に返していた。「タダでタクシーに乗れるのに、どうして返すの？」と私は祖母に尋ねたことがある。すると祖母はこう言った。「ばあばは、自分で歩いて電車に乗ることができる。みんなのお金だから、本当に困っている人にそのお金を使ってほしいのよ。」と。幼かった私は、その時祖母が言った「みんなのお金」という意味がさっぱりわからなかった。

祖母の胸元に入っていた小さな四角いペースメーカー。このペースメーカーを入れる手術も、全額祖母が負担するのではなく、大きな医療費がかかる場合に使われる高額医療費制度というものに、私たちの税金は使われていたのだ。祖母は治療の為に二週間に一度、大きな病院へ点滴に通っていた。この治療費の七割は税金によって支えられていたことを知り、私はとても温かい気持ちになった。

祖母はとても強い人だった。いつも笑顔で優しく、そして周りのことをよく考えることができる人だった。心臓が悪い中、毎日通勤するのは正直きつかったと思う。通院にタクシーを使えば、少しは楽ができたかもしれない。でも、「自分より困っている人がいるから。」と、人を思いやることを忘れなかった祖母を私は尊敬する。一人分のタクシー券を返却しても何も変わらないかもしれない。そんなこと言わずに黙って使えばいいのに、と言う人もいるだろう。しかし税とは、この「思いやり」の上に成り立っているのだと思う。

人は誰しも明日も健康でいる保証などない。自分が払った税金は、めぐりめぐって自分を助け、人を助けている。医療ではなくとも、どこかで誰かの役に立っているのだ。そしてそれは祖母の言う通り、困っている人の為に使われてほしい。

祖母は60才で亡くなった。心臓発作だった。さよならを言えなかったこと。ありがとうを伝えることができなかったこと。祖母の家に置かれてある焦げてしまったペースメーカーを見るたびに今でも悲しくなることは多々あるけれど、祖母の言った「みんなのお金」の意味が十四歳でわかりなんだか誇らしくなった。

ばあば、私もばあばのように、「みんなのお金」を大切に使い、人の役に立てる大人になるよ。